セッションⅥ

ヒンドゥー教の文献とその復興について

Narayan M.Samtani（ナラヤン・M・サムタニ）

一九二四年生まれ。
ボンベイ大学サンスクリット・英語・インド語学科卒業後、ビナール大学パーリ語・仏教史学博士号取得。現在、ベナレス・ヒンドゥー大学教授、また大学委託による仏教用語比較研究の中心的な研究者。専攻：パーリ語および仏教学。
〈主著〉
Arthavinicaya-sutra (1971)他。

一　序

インドは幾多の宗教の発祥の地となってきた。世界中の他のどこを探しても、インドほどに多くの人々と多くの宗教を生み出してきた所はほかにないだろう。インドには、宗教意識の発展に役立つ何か特殊なものがある。インドは真に信仰の地であり、そこには世界のすべての主要な宗教の信奉者たちがいる。

ヒンドゥー教がいつ始められたかをいうのは難しいが、インドの大多数の人々に戒めを与えているのはヒンドゥー教であり、また他の諸国でも何世紀にもわたって影響を与えてきた。今日でも、世界の他の地域に移住した多くのヒンドゥー教徒たちが、伝統的宗教儀式を守り続けている。

ヒンドゥー教は、だれか一人の教祖、あるいは一冊の経典から始まったといったものではなく、「リシ、Rishis」（聖仙）といわれる数多くの霊験あらたかな預言者・賢者たちの知恵と霊的洞察の結集にその源を発する。五千年という年月を経て、ヒンドゥー教は、インド亜大陸上の多種多様な宗教、文化を吸収、消化しつつ、漸次発展してきたのである。[1]

ヒンドゥー教はまた、ジャイナ教、仏教、シーク教を派生した。ヒンドゥー教は、疑う余地なく世界のすべての大宗教の中で最古のものである。「ヒンドゥー」という言葉は、インド北部を流れる大河の一つ「シンドゥー、Sindhu」に由来する。ヒンドゥー教は、一人の教祖の教えではなく、インド文明の黎明期の偉大な預言者・賢者たちの知恵と霊感の結集に基づいており、別名「サンタナ・ダルマ、Santana Dharma」（永遠の信仰）とも呼ば

れる。[2]

二　文献

(1)　ヒンドゥー教の経典

ヒンドゥー教の最古の文献は「ヴェーダ、Veda」であり、今から約三千年前、紀元前千二百年頃に書かれたのではないかとされている。ヴェーダには四つあり、各々「リグヴェーダ、Rig-veda」「サーマヴェーダ、Sāma-veda」「ヤジュルヴェーダ、Yajur-veda」「アタルヴァ・ヴェーダ、Atharva-Veda」と呼ばれる。それらの中で「リグヴェーダ」が最古のものである。これらのヴェーダは、ある学説では、北西の方向からインドに移住してきたとされているアーリア族によって導入されたとされている。

ヒンドゥー教の聖典の第二の主要な部分は、数にして一〇八の形而上学的論文からなる「ウパニシャド、Upanishad」であり、その中でも特に十四（十三ともされる）のものが重要といわれる。[3] それらの大部分は紀元前七、八百年前に作成されたとされているが、その詳しい年代は今もなお論争の的となっている。内容は古代の賢者たちの宗教的、哲学的思想、すなわち人間の生死その他の存在の問題、人生の目標や霊的悟りの段階といった深遠なる諸問題についての師弟の対話を含む。ウパニシャドは、今も広く「ヴェダンタ、Vedānta」として知られている一種の形而上学的な一元論と汎神論を提供した。

「マハーバーラタ、Mahābhārata」「ラーマーヤナ、Rāmāyaṇa」「プラーナ、Puraṇas」もまた、ヒンドゥー教

の経典の一部をなす。「マハーバーラタ」は「バガヴァッド・ギーター、Bhagavad-gītā」と呼ばれる宗教的哲学的詩文をその内容とし、クリシュナ(Krishna)神からの直接的啓示であると見なされている。「ラーマーヤナ」は、ヴィシュヌ(Vishnu)神の第七の権化とされている英雄ラーマ(Rāma)神について、その武勇と妻シータ(Sītā)との貞節を詠じた二万四千節からなる詩文である。ヒンドゥー教徒以外の人々には、それは聖典というよりは単なる寓話に見えるであろうが、敬虔なヒンドゥー教徒にとっては、約束の遵守、父母への恭順、妻への愛の貫徹、あらゆる障害を克服するための勇気といった事柄の大切さを教えてくれているのである。[4] ヒンドゥー教徒にとっては、ラーマ神は神的な徳と勇気の権化であり、ヴィシュヌ神の神的力が人間の形をとって現れた完全なる人格化なのである。「プラーナ」は全体としては、造物神ブラフマン(Brahman)、守護神ヴィシュヌ(Vishnu)、変化と破壊の神シヴァ(Shiva)というヒンドゥー教的三位神への信仰を讃揚するために書かれた古代の教訓的物語である。「プラーナ」の中でも、ヴィシュヌ神の権化であり、ヒンドゥー教では最もよく知られた権化神であるクリシュナ神について物語る「スリマド・バーガヴァータ、Srimad-Bhāgavāta」が特に重要である。

「タントラ、Tantra」もまたヒンドゥー教の経典である。それは、超人的力を得る方法や神霊と結合する方法についてのシヴァ神とその妻カーリ(Kāli)との会話を記録した六十四のサンスクリット語経典を有し、故にその内容は、シヴァ神の妻カーリという女性の形に現れた神的力への信仰を含む。この経典は、至上の幸福はシヴァ神とカーリの夫婦の交わりにあるとしていることから、人間の究極の目標は性的悦楽を通してのみ獲得されるという印象を信者たちに与えている。

ヴェーダにはまた、太陽、月、海、雨、暁といった自然のさまざまな力について詠じた賛歌も含まれている。

そういった賛歌の何れにも、こういった森羅万象の背後に潜む本質的統一と相互連結についての深い直観的認識が浸透している。[5]

(2) 基本的教義

ヒンドゥー教には五つの基本的教義があり、それらは、もし正当に理解されるならば、この偉大な宗教を理解する鍵を与えてくれる。第一のものは、全宇宙にあまねく浸透している不変不死の実体「ブラフマン、Brahman」の概念である。ヴェーダ賢者たちは、宇宙にある森羅万象はすべて変化していくことを見抜き、それゆえ彼らは被造物を「サムサーラ、samsara」(常に動くもの)と呼んだ。しかしまた同時に彼らは、変化の背後に変化しない実体が存在し、その不変の実体から変化する世界が、ちょうど巨大な炎から火花が飛び散るように発せられるのだと見たのである。この究極にして遍在する実体は、「ブラフマン、Brahman」あるいは「パラ・ブラフマン、Para-Brahman」の呼び名であまねく知られており、さまざまなウパニシャッドの中に美しく描写され、例えば「ムンダカ・ウパニシャッド、Mundaka Upanishad」には次のような一節がある。

「ブラフマンは誠に不滅の存在。前方にもブラフマン、後方にもブラフマン、
右にも左にも、上方にも下方にも現れ、
誠にブラフマンは光明なる宇宙。[6]」

ウパニシャッドは霊魂(「アートマン、Ātman」)の不滅を信ずる。この経典によれば、人間存在は永劫にわたって幾度も輪廻転生を繰り返し、幾多の経験を重ね、漸次完成という希望の目標に向かって昇っていくという。その宇宙的な火花を「アートマン」と呼ぶ。「アートマン」の不滅については、バガヴァッド・ギーターにも述べられている。これが第二の教義である。[7]

第三の教義は、「アートマン」と「ブラフマン」が本質的には一つであるというものである。有名な「ダット・トゥヴァム・アシ、Tat tvam asi」('that you are'/汝有ること)は、「アートマン」は本質においては「ブラフマン」(と同一)であるという意味である。

第四の主要教義の内容は、人生の究極の目標は霊的に悟って自己に内在する不滅の「アートマン」を自覚することであるというものである。「アートマン」の悟りは、直ちに自己を新しい次元の世界に導き、悟りに至り得た魂は、生老病死とそれに伴う一切の苦悩の輪廻から超越するのである。

ヒンドゥー教の第五の教義は、「カルマ、karma」(因)と「ファラ、phala」(果)についてである。避けることができない行為の故に、人間個人は各々自らの行為の結果に束縛される。善き行いには喜ばしい結実があり、悪しき行いには喜ばしからぬ報いが伴う。ヒンドゥー教の哲学によれば、われわれが今日ある姿はわれわれの過去の行いの報いであり、また一方、われわれが今行っていることによってわれわれは未来を創造しているのである。中には、「カルマ」が人間各自に対して決定的な影響を及ぼすのだから、未来の運命の鍵は人間自らの手中に預けられているのだと誤解している人さえいるほどに、この考え方は運命論からは程遠い。

時間についてのヒンドゥー教の概念は、直線的でなく循環的であり、宇宙には始めも終わりもなく、顕現と消

滅の循環であるととらえている。

(3) 人生の理想的段階

ヒンドゥー教の伝統によれば、人生は「ブラフマカリヤ、Brahmacarya」「グリハスタ、Grihastha」「ヴァナプラスタ、Vanaprastha」「サンニャサ、Sannyasa」の四つの「アシュラマ、Ashramas」(段階)に分けられる。ヒンドゥー教においては、理想的な寿命は百年と考えられており、これらの段階は各々二十五年ずつを占める。最初の二十五年間は学生として生き、次の二十五年間には家庭生活を営み、五十歳に至るころには「ヴァナプラスタ・アシュラム、Vanaprastha Ashram」(準・隠居)への移行が準備できているべきであるとされる。そして最後には、七十五歳になったら人は社会生活から完全に隠遁し、世俗を断ち、一切の社会的責任から自らを解放し、専ら霊的探求に専念することによって、「サンニャシ、sannyasi」(修道者)になることを期待されるのである。この最終段階を「サンニャス・アシュラム、Sannyas Ashram」と呼ぶ。以上がヒンドゥー教における理想的人生コースであるが、現代のヒンドゥー教徒には、この理想コースに従うのは困難なようである。

(4) 人生の目標

ヒンドゥー教によると、人間には「ダルマ、Dharma」「アルタ、Artha」「カーマ、Kāma」「モクシャ、Moksha」の四つの人生目標がある。「ダルマ」には、正義、美徳、倫理、法規、義務といった多くの意味が含まれている。「アルタ」(富)は第二の目標である。おもしろいことに、ヒンドゥー教では富に対して重要性をおいているばかりでなく、その獲得と利用が広義の「ダルマ」の原則に一致すればという条件の下で、それを積極的に受け入れる。富は不義なる手段で、すなわち「ダルマ」の基本原理に相反するような方法で獲得すべきではないのである。第三の目標は「カーマ」(官能的悦楽)である。苦業者、修道者にとっては肉欲の拒絶が唯一の道であるが、家庭を営む一般の人々には確かにこの方法は適切ではないため、この「カーマ」の概念をヒンドゥー教のエートスの中に組み込んだのである。ヒンドゥー教徒にとって、最終目標は「モクシャ」すなわち、苦悩、老衰、そして究極的には死そのものからの解放である。これは、「サムサーラ、samsāra」(輪廻転生)から人間を解放する霊的段階に到達することによって、生と死の両方から超越することを意味する。

(5) 「アヴァタラ(権化)」の思想

ヒンドゥー教のもう一つの重要な考え方として、「アヴァタラ、avatāra」、つまり、神が人間の形をとって顕現するという「権化」の思想がある。時は循環すると考えるヒンドゥー教では、過去においても無数の「権化」があったし、また未来にも無数の「権化」が続くであろうと考える。ヒンドゥー教の最も聖なる経典「ギーター、Gītā」を見ると、クリシュナ神自身も、弟子アルジュナ(Arjuna)に対し次のように語っている。

「正義が衰え不義が台頭するときには、バラタ(Bharata)よ、そのときには必ず私が自らこの地上に現れよう。善を護り、邪悪を行う者どもを破壊し、そして正義を再建するために、私は代々に現れよう。」(バガヴァッド・ギーター、Ⅳ/七~八)

経典において、ウパニシャドの教えが森林の静寂を設定して描かれるのに対して、このバガヴァッド・ギーターの教えは戦場を設定して描かれる。クリシュナとアルジュナの師弟は、戦いのラッパと叫び声の真っただ中で、形而上学的な問題についての対話を始めるのである。弟子のアルジュナは、突然眼前に展開された自分の親族や恩師たちが自分に敵対して並んでいる光景に驚き慌て、その苦しみに圧倒されてしまう。この危機的状況に瀕して、彼は師クリシュナ神に正しい道を示してくれるよう懇願する。自らの親族や友人たちと殺し合うなど、彼には理解できなかったのである。バガヴァッド・ギーターの対話の設定は、このように現実の人間の苦境に類似している。今日の人間は深刻なる内的葛藤のただ中にある。この人生の戦場においてこそ、正しい導きが必要とされているのである。このように見ると、「ギーター」経典の内容は、特に現代の人間に訴えるべき内容を持っていることが分かる。

ここで特に注記すべきことは、クリシュナ神は、「ギーター」経典において可視、不可視の形式を超越して、畏敬すべき尊厳に満ちた神的存在として顕現していることである。クリシュナ神は、アルジュナの願いに応え、彼に神的姿への変容を見ることができる「天の眼」を与えた。「ギーター」経典の中の神概念は、非人格的な概念ではなく、神的な威厳に引き上げられた人格的概念のような印象を与える。第十一章でクリシュナ神は、アルジュナの前にその神的姿を現しているが、その姿は全宇宙を包含しながらも、その顕現の背後には静寂が含まれたものであった。この光景は、天空に数千の太陽が一斉に昇ったかのごとき、光明溢れる様子として描かれている。

「アヴァタラ、avatāra」（権化）の概念は、ヒンドゥー教では支配的である。最も良く知られているのは十体

の「アヴァタラ」だが、その中の第九番目は、奇妙なことに仏陀なのである。仏陀は経典の中に推薦品的な形では現されていないが、仏陀の包含は、異教さえも吸収し得るヒンドゥー教の包容力の大きさを示している。仏陀の名声と影響力があまりに偉大で、彼を無視することはとてもできなかったらしく、ヒンドゥー教の神々の中に包含されることになったのである。仏陀がヒンドゥー教の十大権化神の中に入っているので、彼は今日もヒンドゥー教徒にも崇拝されている。実際、インドにおいては仏教徒の数は少ない（最近はアムベッカール博士"Dr. Ambedkar"の改宗によって増大した）が、動物献祭などの殺生の習慣に対する強い非難といった形で、仏陀の教えの多くが、今日のヒンドゥー教徒に影響しはじめている。

(6)　偉大な魂の出現と内的活力の保全

ヒンドゥー教は常に、宗教の道を志し神的な何かを体現する人々に対する畏敬の心を保ってきた。学究者たちも尊敬され、支配者たちは恐れられるが、真の尊崇は、運命の輪廻から脱し不滅の境地に至るために宗教の道を歩む者にのみ向けられる。ヒンドゥー教が各々の時代に聖人の魂を数多く生み出してきたということは注目すべき事実であり、そのことは、代々ヒンドゥー教の活力を保ち続けてきたことに大きく貢献している。これらの偉大な魂は、その霊的悟りの輝かしい力をもってヒンドゥー教の内的活力を保全し続け、また災難や試練のときには、ヒンドゥー教社会を復興してきたのである。もしもこのような偉大な宗教的指導者たちが出現していなかったら、真に地の塩たるヒンドゥー教も、度重なる厳しい迫害の中で、既にこの地上から消滅していたことであろう。

ヒンドゥー教には、シャンカラチャリャ(Shankaracharya)をはじめとする偉大な教師「アカリャ、acaryas」が出現し、神や人間の魂、世界についての独自の理論を展開した。彼らは各々独自の学派を形成し、お互いに論争を展開したこともあったが、ヒンドゥー教の根幹としての神聖なるものへの畏敬、献身という基本姿勢は常に保たれてきた。

(7) 三大神とその権化、および女神たち

一般的なヒンドゥー教信仰は、シヴァ神、ヴィシュヌ神などの三大神とその権化と女神たちを中心に展開される。シヴァ神は、森羅万象の背後にある創造的な力を力強く象徴する「リンガム、lingam」とともに、止むことなく崇拝されている。シヴァ神はまた、宇宙的なダンサー「ナタラジャ、Nataraja」としても崇拝される。彼の踊りは、幾百万という世界が瞬間ごとに消滅し、幾百万という新しい世界が現れながら、永遠のリズムの極みに向かっていくという宇宙的な輪廻を象徴している。ここで、破壊のシヴァ神と造者のブラフマン神と守護のヴィシュヌ神は、三体の異なった神ではなく、一つの神的存在の三つの側面であることに注記されたい。

インドにおいて宗教的献身の模範となっているのは、幾多の肉体を持って顕現した女神である。この女神は、シヴァ神の妻パルヴァティ(Parvati)、ヴィシュヌ神の妻ラクシュミ(Lakshmi)、ラーマ神の妻シータ(Sita)、クリシュナ神の妻ラッダ(Radha)として崇拝されているが、この女神は、ただ単に神の妻として崇拝されているのではなく、美と力の本質としての彼女の特権において崇拝を集めているのである。例えば、十八本の腕を持ち獅子に乗り悪魔の群れをあたかも藁のごとくに散らしていく女神ドゥルガ(Durga)、死体の上に立ち自らの肉欲

の敵の血をすする恐怖の裸身女神カーリ(Kāli)、芸術、詩歌、音楽の女神にして、あらゆる学識と知恵を司る女神サラスワティ(Saraswati)などである。[8]

シヴァやヴィシュヌや女神たちに加えて、ほかにも今日に至るまでヒンドゥー教徒にとって献身と信仰の対象となってきた幾多の神的存在がある。その中でも最も代表的なものは、障害を取り除いてくれるという象の頭を持つガネシャ(Ganesha)神である。ここで注記すべきは、こういったさまざまな神々を崇拝するとしても、その崇拝は決して相互に排除的にはならないということである。ヒンドゥー教徒は各々「イシタ・デヴァタ、Ishta-devata」と呼ばれる独特の家庭神を祭り、毎日の祈禱の中では三、四の違った神々に祈り、また寺院を訪れれば、どのご神体にも供え物を捧げるのである。

(8) 瞑想のための象徴

また、ヒンドゥー教では、瞑想のために何らかの象徴が重要であるとされていることも見逃せない。中でも最も重要なのは、ブラフマンの可聴可視的象徴として経典にも書かれ、象徴の極みとさえ評価されている「オーム、Om」(という音)である。この象徴的な「オーム」の音の上になされる瞑想はヨガの重要な一面であり、この言葉は全世界において最近大変な流行にもなった。仏教徒までがこの象徴を仏陀への祈りの中に用いているのである。[9] ヨガその他の哲学体系を問わず、ヒンドゥー教の重要な側面の一つに、「グールー、gūrū」(導師)の優先的尊重の原則がある。両親は肉的生命を与えるだけであるのに対して、「グールー」はもっと重要な霊的生命を与え、それによってのみ各自の宇宙的宿命を成就することができるからである。「グールー」は神の権化のように崇拝

される。

(9) 「バクティ」運動の出現

イスラム教の支配はヒンドゥー教を激しく迫害したが、それにもかかわらず、その下から「バクティ、Bhakti」(神への献身的愛)運動が現れてきた。神の愛とその喜びの福音を説いた一連の特別な宗教的歌手たちが出現した。それ以前には、ヒンドゥー教の教えは、ほぼ独占的に、ヒンドゥー教にとって聖なる言語であったサンスクリット語でのみ説かれたのに対して、この新しい運動は、伝統に固執していた保守的バラモンのしきたりを打破し、ここに初めて、聖なる福音詠者たちの託宣が地方の言語や方言で語られた。古典的ヒンドゥー教のマイナス要素となってしまっていた頑迷なカースト制度やタブーに対して、この運動は革命的挑戦をしたのである。これらの聖なる歌手たちは社会のあらゆる階層から出現し、中にはイスラム教徒や女性まで含まれていた。彼らの託宣は、社会階層や性別を問わず広く一般大衆に向けられていた。

ラマナンダ(Ramananda)、グールー・ラヴィダス(Gūrū Ravidas)、カビール(Kabīr)といった導師たちは、その輝かしい宗教的功績によって、各々の時代において最も尊敬された宗教指導者となった。カビールも彼の時代のインドに多大な影響を与えたが、彼の死に際してその真実性は疑わしいが、一つの伝説が残っている。彼の死体をめぐって、火葬を主張するヒンドゥー教徒と埋葬を主張するイスラム教徒が互いに争った。が、屍衣が除かれたとき、そこにあったのは死体ではなく、それは一山の花であった。それで双方がその花を分け合い、ヒンドゥー教徒は持ち去った半分の花を手厚く火葬にし、イスラム教徒も劣らず手厚く埋葬したという。

「バクティ」運動は偉大な文学者をも生み出した。特に重要なのは、『ラマチャリタ・マナス』(*Ramacharita-manas*)の著者であるトゥルシダス(Tulsidas)と、クリシュナ神をたたえる美しい詩を詠じたスルダス(Surdas)の二人である。二人とも他の聖人たちとともにヒンドゥー教の地位を大いに高めた。事実、「バクティ」運動はヒンドゥー教の活力を盛り上げ、信徒たちをして移り変わる環境の中で永遠の真実を再究明、再評価することを可能にしたのであった。

南インドのカナタッカ(Kanatakka)では、偉大な聖人プランダラダサ(Purandaradasa)が神の栄光を讃詠し、多くの追従者を得た。ベンガル地方では、詩聖ジャヤデヴァ(Jayadeva)が、古典時代以後のサンスクリット語の傑作を、クリシュナ神の物語についての彼の詩「ギーター・ゴヴィンダ、Gita-Govinda」の中に残した。特に優れた聖人チャイタニャ(Chaitanya)は「マハプラッブ、Mahaprabhu」(偉大なる主)と呼ばれ、信奉者たちからはクリシュナ神の化身と見なされたが、彼はベンガル地方で「ヴァイシュナヴァ、Vaishnava」運動を始めた。彼の運動の特徴は、村から村へ町から町へと巡っていった献身的信徒の合唱隊「キルタン、kirtans」であった。合唱に参加した人は、法悦の境地に投じられ、クリシュナ神の栄光に接したのである。

西インドのマハラストラ(Maharastra)では、トゥカラム(Tukaram)とジュナネシュワル(Jnaneshwar)の二人の聖人も「バクティ」運動に影響を与え、ヒンドゥー教の復興に貢献した。「バクティ」運動の偉大な女性聖人としては、年若くしてウダイプールのラナ(the Rana of Udaipur)に嫁したラージプート族の王女ミラバイ(Mirabai, a Rajput princess)がいる。彼女はまだ幼少のころにクリシュナ神への信奉を始め、献身を誓っていた。結婚後も彼女は昼夜クリシュナ神への信仰に務めたため、かえって夫の不満を買い、夫は彼女を毒殺しようとま

でした。しかしクリシュナ神の恵みにより、彼女が主なる神の像の前で法悦に満ちて踊るうちに、その杯の毒は蜜に変わったという。その後ミラバイは世俗の生活を捨て、インド全土を巡って、自らの編じた美しい曲を歌い歩いた。彼女の曲は、ヒンドゥー教の中でも最も感動的で敬虔な曲の中に数えられている。

このように彼らは、ヒンドゥー教の歴史の中で最も困難な時代に、インド全土から湧き起こって、壮大な聖なる歌曲を轟かせたのである。それらは、偉大なヴェーダの真理、すなわち「アートマン」と「ブラフマン」の一如性、すなわち神人一如について、庶民的な用語で再表現され、その福音は、ヒンドゥー教徒の大多数が住んでいた最も小さな寒村にまで伝えられた。

三　ヒンドゥー教の復興

(1)　暗黒の時代からの復活

ヒンドゥー教の歴史全体をある角度から見ると、常に挑戦と応戦の行程であったと見ることができる。英国人がインドに来たときには、ヒンドゥー教は恐らく最も衰退した時代に至っていたといえる。あらゆる迷信や妄動が宗教の名を装って氾濫し、カースト制度のタブーはあまりに桎梏化し、ヒンドゥー教社会は大変な危機と衰退に瀕していた。

一千年の昔には、アジアの四方に宣教師を派遣したヒンドゥー教だったが、当時は、その本国の宗教伝統を再建、純化するために、逆に戻ってきてくれることを願わざるを得なくなっていた。女性たちは集団家族制の中で

道徳の奴隷と化し、中でも未亡人たちに対する扱いは残酷を極めた。また神学的にも、ヒンドゥー教の思想の背後にある偉大なヴェーダの真理は、迷信や妄動の氾濫の中に吸収されてしまっていた。実際、当時はインドの歴史上、最も暗黒の時代であり、ヒンドゥー教はついにその霊的活力を枯渇させ、西洋物質主義の新たな攻勢に直面して、徐々に消滅していくかのようであった。しかしまたここでも復活の奇跡が起こり、ヒンドゥー教社会は、死に瀕していた生命の火花を輝かしい宗教的洞察をもって再燃せしめた一連の優れた人物たちを輩出したのである。

(2)　キリスト教の影響下での大運動

ヒンドゥー教の社会的改革と文化的復興の大運動の先頭を切ったのは、ベンガル地方であった。近代インドの父と評され、すばぬけた知性を持ったラジャ・ラム・モハン・ロイ(Raja Ram Mohan Roy, 一七七二～一八三三)は、ベンガルに英国式の中等学校を創設するにおいて指導的役割を果たし、一八二八年に「ブラフマ・サッバ、Brahma Sabha」を創設した。この団体は後に、後継者ディヴェンドゥラナト・タゴール(Devendranath Tagore)の指導の下に、「ブラフモ・サマージ」を設立し、それとその支派は皆、偶像崇拝や「サティ、Sati」(夫の火葬のときに妻を強制的に火葬壇の上で共葬するという風習)といった悪習を強く攻撃した。特にカシャブ・チャンドラ・セン(Kashab Chandra Sen)を代表とするこの運動の指導者たちは、英国の支配の下で活発な運動を展開していたキリスト教宣教師の方式に少なからぬ感化を受けており、彼らが催した祈禱会の多くは、キリスト教会の活動を模範としたものであった。

「ブラフモ・サマージ」の影響の下にさまざまの他の運動が展開され、中でもブラヴァツキィ夫人(Madame

Blavatsky)が設立した「プラルタマ・サマージ、Prarthama Samāj」(神智学協会、the Theosophical Society)が有名である。ヒンドゥー教復興へのアニー・ベサント夫人(Mrs. Annie Besant)の貢献もまた劣らず大きい。また、マックス・ミュラー(Max Muller)、オッデンベルグ(Oddenberg)、フェルギュソン(Fergusson)、カニンガム(Cunningham)等の欧米の学者たちによる古代インド経典の再発見や、欧米の考古学者や言語学者の作品も、何世紀にもわたる異邦人の支配の下で無視され埋没していたヒンドゥー教の過去の偉業に、大変な光を照らした。こういった新しい運動や発見は、十九世紀のヒンドゥー教徒をして、自らの豊かな文化的遺産に対して新たな再認識を促し、自分たちの古代への誇りを新たにしたのである。

(3) ヒンドゥー教の伝統的真理の再評価

ヒンドゥー教復興の主人公は、一八七五年に「アーリャ・サマージ、Ārya Samāj」を創設したスワミ・ダヤナンド・サラスワティ(Swami Dayanand Saraswati, 一八二四～一八九三)である。キリスト教に大きな影響を受けた「ブラフモ・サマージ」一派と違って、「アーリャ・サマージ」は戦闘的なヒンドゥー教根本主義であった。スワミ・ダヤナンドは、ヴェーダ時代の原始ヒンドゥー教の純粋な信仰に帰るべきであると熱心に主張し、「プラーナ」のようなヴェーダ時代以後のヒンドゥー教経典を批判した。彼はまた、偶像崇拝やカースト階級制度を非難する一方、完全な男女平等を唱導して、女子教育を強調した広範囲の教育運動を展開し、また不可触賤民階級制に反対して十字軍活動を始めた。「アーリャ・サマージ」運動は、インドに一連の教育機関を創設するという結実を得た。

復興運動の他の指導者としては、スリ・ラムクリシュナ・パラマ・ハンス(Sri Ramkrishna Parama Hans, 一八三六～一九〇二)、スワミ・ヴィヴェカナンド(Swami Vivekanand, 一八六三～一九〇二)、スリ・ラマン・マハルシ(Sri Raman Maharshi, 一八七九～一九五〇)、スリ・アウロビンド(Sri Aurobindo, 一八七二～一九五〇)、マハトマ・ガンディー(Mahatma Gandhi, 一八六九～一九四八)がいる。これらの人々はいずれも、ヒンドゥー教の伝統の革新から抽出されたヒンドゥー教経典の永遠の真理を、彼ら独自の卓越した学識によって再評価した。スリ・ラムクリシュナは、ヒンドゥー教は、新しい教育を受けた知識人たちが考えはじめているような、死に絶えつつある宗教などでは決してなく、霊的活力の尽きることのない泉であることを示した。

(4) 世界に向けてのヒンドゥー教の再主張

スリ・ラムクリシュナの弟子であり、並はずれた学識を持ったヒンドゥー教僧侶スワミ・ヴィヴェカナンドは、一八九三年に米国シカゴで開催された宗教議会(the Parliament of Religions)において、ヒンドゥー教が提供する価値について再主張することに成功した。彼はヒンドゥー教の教義を世界の現状という観点から再表現し、神に神性があるのみならず、人間にも生来の神性が賦与されていることを再認識したのである。彼の教えの特徴は、社会への働きかけ、すなわち貧困、虐待、病苦、飢餓に苦しむ人々への奉仕を強調したことにある。「空腹に苦しむ人々に宗教を説くことは罪である。神がインドの大衆の前に現れることができるとすれば、それは唯一、パンをもってのみである」という彼の残した名言は有名である。霊的生命の優位性を強調した彼は、内的宗教的力のみがインドを物質的、知性的、霊的束縛から解放することができると説いた。ヴィヴェカナンドはまた、すべ

ての宗教は本質においては一つであると主張していた。

(5) 自己認識の探求、および精神的民族主義

スリ・ラマン・マハルシの教えは、ヴェーダンタ哲学における自己認識の行程を説明している。彼は、自己認識の探求こそが宗教的努力の中心であるとし、霊的内省のプロセスを大いなる慈愛をもって説明した。

素晴らしい精神と深い霊力に恵まれたスリ・アウロビンド・ゴーシュ(Sri Aurobindo Ghosh)の名も、この輝く導師たちに加えられている。他の民族的指導者たちとともに、彼はインドにおける民族解放運動に関心を払った。彼の政治哲学は精神的民族主義と呼ばれた。彼は、個人の救済についての伝統的なヒンドゥー教の考え方は拒絶しながらも、民族全体への意識に力点をおいた側面のヒンドゥー教の伝統を強調した。

(6) マハトマ・ガンディー

インドという舞台に最後に登場するのは、「民族の父」という称号にふさわしい偉大な人格者、マハトマ・ガンディーであった。民族解放運動を政治的に指導しながら、彼は、自らの政治哲学の礎となった「サティヤ、Satya」(真理)と「アヒムサ、Ahimsa」(非暴力)の新しい思想をもたらした。特に注目すべきことは、ガンディーの政治的アプローチがヒンドゥー教の原則に深く根差していたことである。彼自身、敬虔なヒンドゥー教徒であり、ヒンドゥー教が生み出した最も偉大な社会革命者の一人として、歴史に名を残している。

ガンディーのヒンドゥー教への主要な貢献は、彼の不可触賤民の問題を取り上げた方法にあるといえよう。賤

民階級に対する差別、虐待が、ヒンドゥー教社会の最も醜悪な一面であったからである。彼はまた、民族解放運動の中に多数の婦人たちをも参加させた。ガンディーの自叙伝『真理とともにある私の実験、*My Experiments with Truth*』は注目すべき著書であり、そこには、ヒンドゥー教の根本的理想に対する彼の深い傾倒が描かれている。彼はすべての宗教の本質的な統一と調和についてのヒンドゥー教の考え方を強調し、彼の開いた祈禱会には、ヒンドゥー教の経典のみならず、他宗教の聖典の内容も用いられた。

(7) 終わりに

結局のところ、ヒンドゥー教は内的原動力を取り戻し、そして今や、ヒンドゥー教徒のみならず人類全体に対して、特に意義深い一つの鍵を与えるような考え方を提示しているのである。

この論文を終えるに際し、『バガヴァッド・ギーター』より二つの名言を紹介しよう。

「苦楽、損得、勝敗を同じものと考えて、闘いに対してしっかりとした心構えをしなさい。そうすれば、あなたの身に悪が襲い来ることはないであろう。」(Ⅱ/三十八)

「行うことだけがあなたがたの正しい務めであり、決して、行いの結果にこだわったり、益のない虚しい空論をもて遊ばせたりするべきではない。」(Ⅱ/四十七)

これは、ヒンドゥー教の経典からの感動的なメッセージの一部分である。現代においても、これらの内容が含

む意味はいかに大きいことであろうか。

註

(1) (参照) 金永雲 *World Religions* (New York, 1982), p. 3-4 ('Hinduism').

(2) (参照) Karan Singh *Religion of India* (ROI/New Delhi, Clarion Books, 1983) p. 19 ('Hinduism ').

(3) ウパニシャドの数については論争があるが、基本的なものは十三～十四であると考えられる。Karan Singh は、「百八のウパニシャドの中で、少なくとも十四のものが主に重要である。」(ROI, 二十一頁) と述べている。R・E・ヒュームは、「ウパニシャドの十三の主柱」というタイトルで、ウパニシャドの主要なものを英訳した。(ロンドン、オックスフォード大学出版部、一九三一年)

(4) (参照) 金永雲 *World Religions* (New York, 1982), p. 6 ('Hinduism').

(5) (参照) Karan Singh *Religion of India* (ROI/New Delhi, Clarion Books, 1983) p. 20 Hinduism').

(6) (参照) Mundakan Upanishad, 2.2.12.

(7) (参照) Bhagavadgita, II.23.

(8) (参照) Karan Singh *Religion of India* (ROI/New Delhi, Clarion Books, 1983) p. 32 ('Hinduism').

(9) 「ナモ・ブッダヤ、namo buddhaya」の前の「アルタヴィニスカヤ・スートラ、Arthaviniscaya-sutra」における賛辞の祝詞の中で「オーム、Ōm」が用いられている。(参照) 拙著 *Arthaviniscaya-sutra and its Commentary* (Patna, K.P. Jayaswal Reserch Institute, 1971), p. 71.

コメント

シンガポール大学教授　A・N・ラオ

一　ヒンドゥー教における統一の概念

まずヒンドゥー教における統一の概念について述べてみたいと思います。サンスクリットでは統一をサンスガといいますが、この概念には謙遜の意味が非常に大きな部分をなしています。良い行いあるいは犠牲心というものは、人々が統一を達成しようとして協力し合うところに達成されます。お互いに良いところを受け入れ、支え合っていくところに、一体感というものが生れてくるのです。統一はさまざまなレベルで達成されますが、私たちのさまざまな言動の対立について、これを理性に基づいた考え方で進めていきますと、統一に到達することは難しいと思います。しかし私たちは、周りに対する気配り、あるいは配慮といったものを通して、調和をもたらすことができます。このような原理は、私たちのすべての行動に適応することができます。

統一に関しては、哲学の観点あるいは宗教、実践の観点から討議することができます。まず哲学的観点を取り上げてみます。自然における統一あるいは融合調和、そしてそれが人間にどのような影響